


東京都立知的障害特別支援学校
中学部自閉症学級指導書

社会性の学習



平成 24 年 3 月

 東京都教育委員会

はじめに

この指導書は、東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画に基づく「自閉症の児童・生徒の指導内容の充実事業」として、平成 23 年度に都立知的障害特別支援学校 5 校を研究指定校に指定し、中学部の「社会性の学習」についての研究・開発を行った成果をまとめたものです。

平成 16 年度から始めた東京都における自閉症教育の推進事業の中で、自閉症の教育課程における「社会性の学習」は、自閉症の障害特性に応じた新たな各教科等を合わせた指導として開発されました。

平成 21・22 年は、知的障害特別支援学校小学部において、「社会性の学習」の研究・開発を行い、平成 22 年度に、「知的障害特別支援学校小学部自閉症学級指導書 社会性の学習」としてまとめました。本書は、小学部に続く、中学部自閉症学級指導書として作成されました。

自閉症のある生徒は、一人一人の障害の特性にも幅があり、また、自閉症の障害の一つである社会性の障害に起因する課題を解決する「社会性の学習」の指導内容は、中学部段階では小学部よりも更に幅があるものとなります。このため、本書で紹介した課題一覧や事例、活動例は、中学部「社会性の学習」の指導内容等の一つの例としてお考えください。本書と小学部自閉症学級指導書を参考にして、各学級の実態に応じて、適切な「社会性の学習」の指導計画を作成し、指導を行うようお願いいたします。

本書の作成においては、多くの専門家の先生の御協力を得ました。自閉症教育の研究は、まだまだ研究途上です。東京都教育委員会では、今後も各特別支援学校の実践や成果に応じて、内容を改善し、自閉症のある児童・生徒のもてる力を最大限引き出す教育を推進していきます。

理論編

| | |
|------------------------------------|----|
| 第1章 自閉症の教育課程と「社会性の学習」 | 2 |
| 第2章 認知の学習と般化の学習 | 4 |
| 第3章 中学部における「社会性の学習」 | 7 |
| 第4章 自閉症のある生徒の課題と指導内容 ～課題整理表の作成～ | 17 |

第1章 自閉症の教育課程と「社会性の学習」

1 自閉症の教育課程

東京都教育委員会は、平成16年11月に「東京都特別支援教育推進計画」を策定し、その中で「知的障害養護学校における自閉症の児童・生徒の教育課程の研究・開発」を示し、自閉症の教育課程の研究・開発に着手しました。

平成22年度には、小・中学校部を設置している全ての都立知的障害特別支援学校において、自閉症の児童・生徒で編成した「自閉症学級」を設置し、自閉症の教育課程を導入しました。自閉症の教育課程は、自閉症の児童・生徒の障害特性である、社会性や認知・コミュニケーション等の困難さに対する必要な支援を行うとともに、感覚の過敏性などに配慮した環境の中で、自立を図るために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うことを目的とし、教育課程の中心に、知的障害特別支援学校の「各教科等を合わせた指導」の新たな指導の形態として「社会性の学習」を創設しました。

東京都教育委員会は、平成21・22年度に「知的障害特別支援学校における自閉症の児童・生徒で編成した学級での指導の研究・開発委員会」を設置し、知的障害特別支援学校の小学部における「社会性の学習」について研究・開発を行い、平成23年3月に「東京都立知的障害特別支援学校小学部自閉症学級指導書 社会性の学習」を作成し、全ての都立特別支援学校に配布しました。

2 「社会性の学習」の目標と位置付け

(1) 「社会性の学習」の目標

目標

一人一人の自閉症のある児童・生徒が、対人関係や社会生活に関わる行動について対応できるように必要な知識、技能及び習慣を養い、適切な支援を受けながら行動できる力を培うことを目標とする。

(東京都立特別支援学校小学部・中学部 教育課程編成基準・資料より)

この目標を達成するためには、自閉症の児童・生徒が、現在の学校生活や家庭生活もしくは将来の地域生活において出会うであろう、つまずきやすいこと、困ることなどの困難な状況を想定して、その困難を改善、軽減していけるような知識や技能・態度を学習する方法を見出すことが重要です。さらに、モデルや視覚的な手掛かりのような支援のための手だてを合わせて考えていくことが大切です。

(2) 教育課程上の位置付け

「社会性の学習」は、学校教育法施行規則第130条第2項の規定による各教科、道徳、特別活動及び自立活動の一部又は全部を合わせて指導を行う「各教科等を合わせた指導」の一形態として位置付ける。

(東京都立特別支援学校小学部・中学部 教育課程編成基準・資料から)

「社会性の学習」は、自立活動も含む、各教科等を合わせた指導に位置付くものとして規定しました。この理由は、自閉症の障害の特性の一つである社会性の障害に対して、各教科、道徳、特別活動及び自立活動の指導内容との関連を図り、より包括的な指導を行うことが、実際の生活の中での改善につながると考えられたからです。

3 対人関係の課題とソーシャルスキルの課題の重点の置き方

「社会性の学習」のねらいは、社会性の障害の起因する現在や将来の生活上・学習上の困難の軽減ですから、学校生活全般における児童・生徒の現在の学習課題や生活から、その段階で取りあげるべき「社会性の学習」のねらいも設定されることが望ましいと言えます。

そこで、初めて学校生活を始める小学部の低学年においては、まず、人とのやり取りや、教師とのやり取りを学び、人から期待されることを理解し、賞賛や評価を受けることを学ぶこと、そして、集団活動の基礎を学ぶとともに、児童・生徒相互の関係を作る学習に重きが置かれる段階です。

このような段階である小学部低学年の自閉症のある児童にとっては、自閉症の障害から起因する対人関係の困難さを少しでも軽減し、支援を受けながら、様々な学習の機会に対応できるようにしていくことが大切です。そこで、次の図のように、小学部の低学年では、まず、対人関係に関することに重きが置かれ、年齢段階があがるにつれて、社会生活も広がることから、中学部段階に近づくにつれて、「ソーシャルスキルに関すること」という指導内容の重点の置き方を考慮することが必要であると言えます。また、年齢段階や環境の変化などの社会生活の関係により、対人関係に関する指導の内容も中学部段階では、小学部段階の内容と変わっていきます。

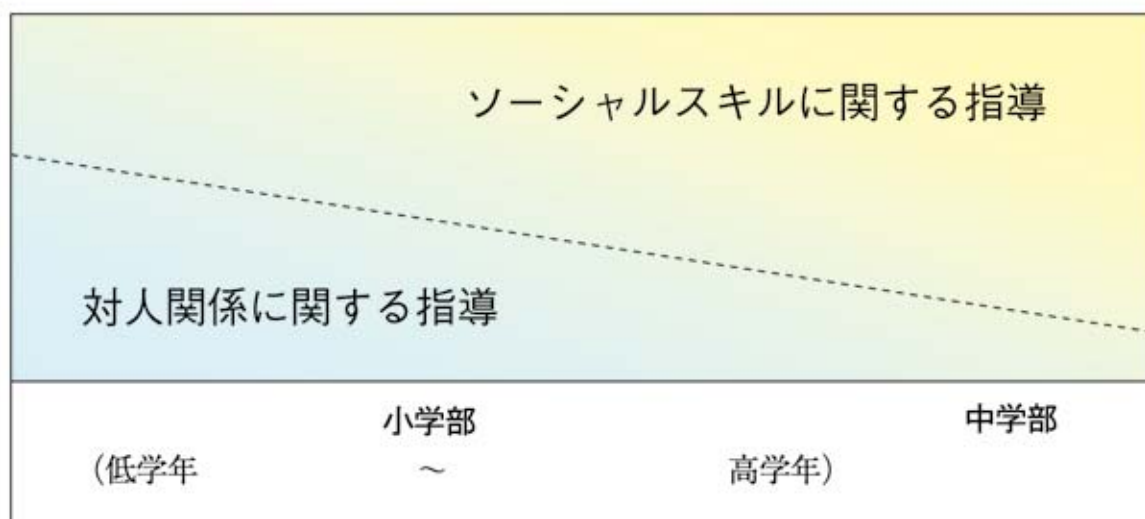
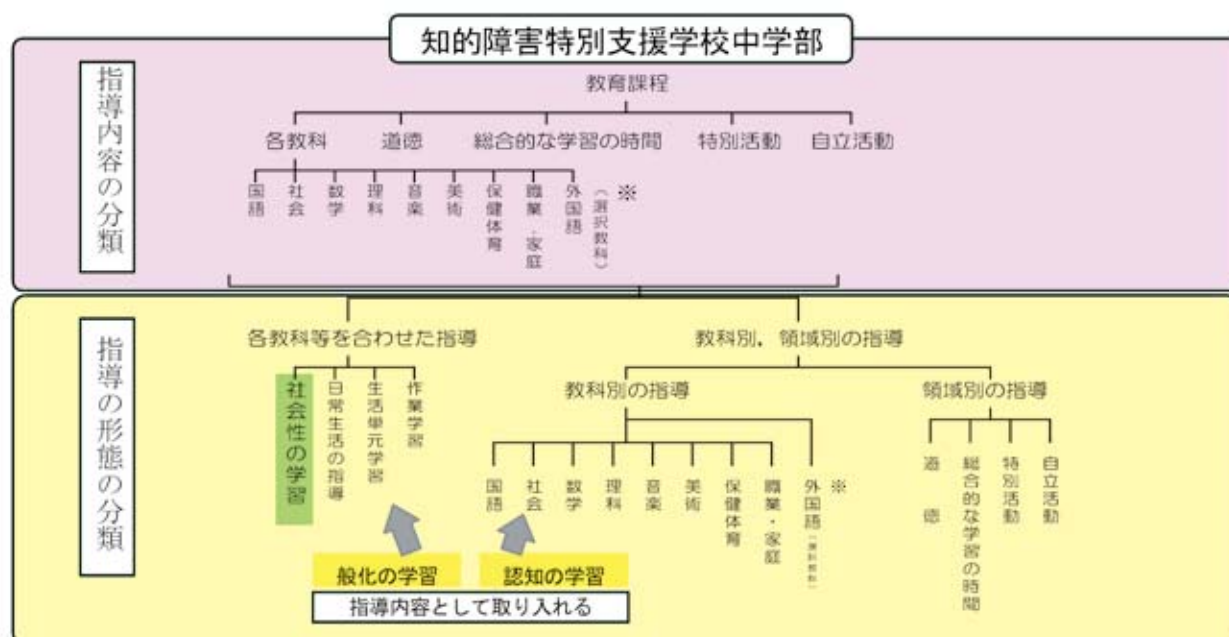


図 指導内容のバランス

第2章 認知の学習と般化の学習

1 自閉症の教育課程と認知の学習・般化の学習

自閉症の教育課程が、知的障害の教育課程と大きく異なる点は、「社会性の学習」を各教科等を合わせた指導として位置付けるとともに、**認知の学習**、**般化の学習**を領域や教科の**指導内容・方法**として位置付けていることにあります。認知の学習、般化の学習は、国語・数学や生活単元学習等の授業の中で、認知の学習、般化の学習の視点に配慮して指導することが大切です。



2 認知の学習について

(1) 認知の学習のねらいと視点

認知の学習のねらいは、自閉症の情報処理過程の特性に応じた指導方法を工夫することにより、人や環境との関係の中で行動する力の基本を養うことをねらいとします。自閉症の児童・生徒の弁別や言語の獲得、情報処理の仕方は特徴的であり、それに対応した指導内容と方法の工夫が必要です。一人一人の児童・生徒の認知の力に応じた展開が大切であり、個別の指導が必要になる場合もあります。

学習の仕方としてのワークシステムを活用することも有効です。また、生活に活用できる学習を設定して、知識等を生活場面と関係付けることや児童・生徒一人一人の認知特性を考慮した手掛かりとなる文字や写真、絵カード等による手順表、スケジュールカードの学習などが大切です。このような学習は様々な学習や生活場面で有効に活用できます。

(2) 認知の学習の指導内容

① 自閉症の認知の障害

一般的に自閉症を伴う児童・生徒は、次のような障害の特性から学習上の困難があります。

- 通常の環境の中にある評価や賞賛(強化子)などからの学習の動機付けが弱い。
- 聴覚情報よりも視覚情報の方が分かりやすい。
- 学習や弁別のために必要な情報のみを取り出すことが困難であり、複数の情報を同時に処理することが困難である。
- 具体的に正誤の明らかな課題は理解しやすいが、抽象的なものの理解が難しい。
- 見通しがもちにくく、また新しい場面に慣れることが困難で、興味の範囲が限定的である。
- 機械的な記憶力は比較的よく、短期記憶より長期記憶のほうが良い。
- いろいろな情報から全体像をつかむことが弱い。

また、自閉症の児童・生徒の発達には、個人差が大きく、さらに、個人内の発達もアンバランスがあることから、上記のような障害特性を踏まえながら、学習内容を一人一人に応じて提供することが課題となります。

認知の学習の指導内容例

- 基本的学習態勢・・・アイコンタクト、指差ししたところを見る
- 弁別とマッチング・・・色、形、絵、文字、数字、具体物、記号、シンボル
- 分類・・・色、形、用途
- 複数の刺激への対応・・・色と形、大きさと色
- 空間、位置、方向・・・左右、上下、前後
- 始まりと終わり・・・始点・終点、時間の経過
- カテゴリー・・・甘い、辛い、固い、柔らかい
- 模倣・・・音声、動作、物を使っての操作
- 言語理解・・・名前、具体物、動作の言葉、指差し、同じ、違う
- 言語表出・・・発声、音声模倣、発語(返事、名前など)、要求表現
- 数概念・・・数字、数詞、数唱、大小、多少、同じ、対応

② 認知の学習をすすめるためには

認知の学習では、各教科別の指導、教科等を合わせた指導(国数など)や領域別の指導で学習をしていく上で基礎となる力を学習することも含まれます。学習を進めるためには、指導者の指示を理解する必要があります。一人一人の児童・生徒が、どのような指示なら理解できるかをアセスメントするとともに、認知の学習で学習したことを活用していくことが大切です。以下に、指示の例を示します。

- 音声言語の提示が理解できる。
- 文字の提示が理解できる。
- 絵・写真の提示が理解できる。
- 身振り、表現の提示が理解できる。
- 指差しが理解できる。

③ 手順表やスケジュールの理解

手順表やスケジュールの使用方法について学習することは、「社会性の学習」で学びますが、手順表やスケジュール表に使われている絵や写真を一致させること絵や写真を見て、活動を表していることを理解することについては、「認知の学習」で取り扱う内容です。

手順表やスケジュールの理解に基本は、絵や写真の弁別、絵や写真と動作、活動のマッチングであり、実際の生活や「社会性の学習」で活用する前に、いろいろな絵の提示が活動に結び付くような練習が必要です。

3 般化の学習について

(1) 般化の学習のねらいと視点

般化の学習のねらいは、「獲得したスキルを使い、類似する状況において、同様な行動を行えるようにすること」です。学校の指導と家庭の指導や地域などの活動につなげて般化させたい内容を計画的に学習することや、多様な場面で応用できること、共通の手掛かりをもつようにすることを授業の中で指導内容や視点としてとして取り入れていくことが必要です。

自閉症の児童・生徒の般化の困難さは、児童・生徒のコミュニケーション、情報処理、記憶の困難さなどに関係していると予想されます。学習したことを、学習した場面と別の場面等へ般化させるためには、あらかじめ般化を配慮した指導計画を作成することが大切です。そのためには、般化させるべき環境をあらかじめ調査しておくこと、場面や人、物が変わっても使える手掛かりとなる手順表や作業工程表などを使用することが重要です。

(2) 般化の学習の指導内容

① 物の般化の難しさと指導の方法

操作できる機器と同じ機能をもつ道具でも、一部の色、形、メーカーが異なることで、使えなくなることがあります。

このような場合は、同じような機器をいくつか用意して、道具のどの部分に注意すればよいかを学習し（ビデオデッキの再生・停止・先送りボタンなど）、指導の段階から実際に使う場面と同じ機器を使って学習するなどの方法があります。

② 人の般化の難しさと指導の方法

人と対面して活動する、あるいは一緒に活動することである人とはできていた活動が人と異なることでできなくなる場合があります。例えば、掃除の指導者が代わってできなくなった、買い物のお店の店員が代わってできなくなったなどがあげられます。

このような場合は、人に依存して活動するのではなく、手順カード等の人が代わっても使い続けられる手掛かりの使用が考えられます。

③ 場所の般化に難しさと指導の方法

家庭でできている身辺処理が学校でできない、また、買い物やファーストフード等の利用では、店舗が異なると円滑に利用できなくなるなどがあります。これは、それぞれの場所の物の置き方や人の違いなど様々な環境的な刺激の違いに影響を受けていると考えられます。

このような場合は、手掛かりとしての買い物カードやスケジュール等の場面によらず使用できる手掛かりを使って学習するなどの方法があります。

第3章 中学部における「社会性の学習」

1 中学部段階の社会性の学習

第1章で記述したように、小学部段階の社会性の学習は、対人関係に関する指導に重きが置かれます。中学部段階の社会性の学習については、対人関係に関する指導内容の変化とともに、ソーシャルスキルに関する指導により重きが置かれてくると言えます。

社会性の学習のねらいは、社会性の障害に起因する現在や将来の生活上、学習上の困難の軽減ですから、中学部の生徒の生活を踏まえて、課題を設定する視点が非常に重要です。中学部段階の生徒になれば、生活の幅も家庭中心から、家庭を中心とする地域に広がっていきます。

また、中学部卒業後は高等部に進み、生活の幅も地域生活に加え、職業生活に広がっていくこととなります。このため、中学部段階の社会性の学習は、小学部よりも一層、社会で出たときに想定される社会性の障害に起因する生活上、学習上の困難の軽減を図ることが重要になります。

2 中学部の社会性の学習の指導の基本的考え方

(1) 中学部の自閉症の生徒が、障害特性から直面する困った状況

自閉症の生徒は、その障害特性から社会生活の中で、その場に応じた行動ができなかったり、その場の雰囲気に沿った行動ができなかったりすることがあります。社会性の障害とともに、コミュニケーションの障害や想像力の障害があることが、社会生活の中で状況にあった行動や周囲に適応することが困難な場合も生じます。

このような行動は、時には周囲から課題がある行動と言われたり、問題行動と言われたりすることもあります。

しかしながら、これは他者からの視点で自閉症の生徒の行動を考えたときの見方であるとも言えます。自閉症の生徒の立場で考えると、これらの行動は、自閉症の障害特性から生まれた不得意により、生徒が意図したものではない、取らざるを得なかった行動であるとも言えます。

(2) 対人関係や社会生活に関わる行動について対応できるための力

中学部の社会性の学習では、困難な状況に出会うことがあっても困難さを軽減していくような対応を学ぶ授業であるとも言えます。

繰り返しになりますが、社会性の学習は、自閉症の障害特性に直接アプローチして障害をなくそうとするための学習ではありません。自閉症の障害ゆえに生じる学習上、生活上の様々な困難に直面したとき、対応できる知識や技能等を学習していくとともに、支援のための手立てを考えていくことにより、周囲との関係で生じる困難さを軽減し、社会参加の幅を広げていくことです。

このため、中学部の生徒が、自閉症の障害特性に起因する困難に対して対応できる方法を見出し、本人に提供し、獲得できるようにし、さらに使用することができるようにすることが社会性の学習の目的になります。

① 状況に応じた行動やその場に適した行動

まず、中学部の生徒が社会生活に関わるとき、社会的に望ましい行動やその場にあった適切な行動があるはずで、例えば、図書館や電車・バスの中では静かにする。スーパーで買い物をするとき、お店の中で走らないとか、商品を大切に扱うなどのマナーなど、が考えられます。社会性の学習で学ぶ目的の第一は、社会の中で活動するとき、このような、社会的に望ましい行動やその場にあった適切な行動をしたほうが良いということを生徒と一緒に確認することになります。

② 社会的に望ましい行動をするための知識・技能・態度の学習

①のように、中学部の生徒が現在や将来の社会生活（学校・家庭も含む）で、様々な活動をするときの社会的な望ましい行動や適切な行動のための知識や技能・態度を学習します。具体的な指導内容の例としては、場や相手にふさわしい挨拶の仕方、場面に応じた人に期待されること（指示されたこと）への対応、場に応じて人にゆずったり、交代で行うなどの協調的な行動、レストランや公共交通機関でのマナー全般などが考えられます。

③ 望ましい行動をするために援助を必要とした場合の指導

自閉症の生徒は、その社会性の障害から②のような望ましい行動を、通常的环境や普通にある刺激の中で、自ら判断し考えて行動することや、周囲の人に合わせて行動することは困難な場合があります。このような場合、望ましい行動をするために何らかのかたちで困難を軽減できるよう援助となる方法を指導することも社会性の学習の大きな目的です。また、同様に、自閉症の生徒のコミュニケーションの障害や想像力の障害から、望ましい行動をすることが難しいとき、それを容易にできるための方法を指導することも考えられます。援助となる方法とは、行動のきっかけとなる手掛かりや支援ツールの使用、モデル的な行動を教えることです。具体的には、順番表や役割分担表、マナーを書いたカード、コミュニケーションのためのカード（たすけてくださいカード等）、買い物メモや手順カード、場面に適切な行動をとるように示した絵（モデル行動の図式化）などの様々な支援ツールです。社会性の学習では、このような支援ツールの使い方を身につけることも重要な目標になります。

(3) 社会性の学習で学んだことを実際の生活で生かす

中学部の社会性の学習において、重きが置かれているソーシャルスキルに関する指導内容は、生徒が、実際の学校生活や家庭生活・地域生活で、様々な人と生活する中で、人とうまく関わり、人が嫌がったり、困ったりする行動をすることなくルールやマナーなどを理解し、適切な行動をとれるようにしていくことです。このため、指導計画を立案する段階で、社会性の学習の時間に学んだことをどのように実際の生活の中で生かしていくか（般化）の視点を加えていくことが重要です。

(4) 一人一人の生徒の実態や特性に応じた指導

前述のように、生徒が望ましい行動をするための援助となる方法の指導は、社会性の学習の大きな内容です。援助方法は、手掛かりや支援ツールの使用になります。手掛かりや支援ツールの使用を指導する場合も、生徒一人一人のコミュニケーション能力や想像力等の実態や特性に応じて、一人一人の生徒が確実に自ら手掛かりや支援ツールを活用できるように学習していくことが重要です。そして、そのように学習したことは、他の学習場面でも使えるようになると考えられます。

(5) 状況や行動の文脈を大切にした指導

中学部の社会性の学習は、実際の学校生活や家庭生活・地域生活で使える知識や技能等を身に付け、必要に応じて支援ツール等を使用できるようにするための指導です。このため、実際の授業でも目標とする知識や技術を適切な文脈（状況や背景などを含む、ある行動の前後関係も含めた一連の流れ）で指導していくことが重要です。社会性の学習で学習することは、その場の状況や他者からの期待や他者からの対応に応じた社会的に望ましい行動です。したがって、どのような状況で、どのような行動をするか、を明確にすることが重要です。

(6) 必然性を大切にした指導

社会性の学習の活動を設定するとき、活動に必然性があるかを検討することが重要です。

例えば、ゲームをするために教室の机などを廊下に運び、スペースのできた教室でゲームを行うというように、物を運ぶ活動に必然性があることが大切です。この場合は、楽しいゲームをするという目的が、物を運ぶということの動機付けにもなります。対人関係を中心とした学習では、友達と一緒に活動することが中心となります。

ソーシャルスキルの学習では、「教室の片付けはみんなが役割分担していくこと」、あるいは「一人に全てを任せないこと」などの望ましい行動を判断していく学習が第一にあります。このことを判断して役割分担し、集団の一員として分担された役割を果たしていくこと、また、必要に応じて複数の友達等と協力して役割を果たし、果たしたことが評価され、人から期待された行動がとれたことを確認するといった一連の活動がソーシャルスキルの学習となります。

3 中学部の社会性の学習の指導

(1) 実態の把握

社会性の学習の指導に限らず、個別指導計画などを作成する際には、指導目標や指導内容を設定するために、生徒の的確な実態の把握が重要です。実態把握に基づき、指導目標や指導内容は設定されるものであると言えます。

社会性の学習の場合も、具体的な指導目標を設定する場合は、生徒の実態の把握に基づく設定が重要です。11 ページの図は、社会性の学習の指導目標を設定す

る場合の実態把握の例を示しました。実態の把握は、社会性の学習のために新たに行うということではなく、個別指導計画等の作成の段階で実施された内容を改めて整理することでも可能です。

また、実態の把握には、図のようにインフォーマルな検査とフォーマルな検査がありますが、多くの場合、一つの検査の結果から、指導目標が具体的に設定されるということではなく、行った検査の結果を総合的に判断して、具体的な目標が設定されます。

① インフォーマルな検査

インフォーマルな検査とは、標準化された検査ではなく、児童・生徒の日常生活の様子を直接観察し、明らかにしたい側面について設定された項目に応じて、整理するものです。記述しているように、中学部段階の社会性の学習の場合は、社会の中で、実際に生かしていく知識や技能、態度や行動を教えることですので、実際の生活場面での様子の整理が重要になると考えられます。生活場面で見られる社会性の障害に起因する困難に対して、支援を必要とする場面、内容等が明確になります。したがって、どのような支援ツール等を獲得し、どのような時に使用できるようにすれば、困難に対処したり、軽減できるようになるか予想できます。インフォーマル検査はその予想を立てることを含みます。

② フォーマルな検査

フォーマルな検査は、研究や実験によって開発され、標準化された検査です。今回の検討会において、専門委員より社会性の学習の参考になる検査として、新たに、TTAP（自閉症スペクトラムの移行アセスメントプロフィール）を紹介していただきました。TTAPは、米国の **TEACCH Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped CHildren**（自閉症及び近縁のコミュニケーション障害の子供のための治療と教育）が開発した自閉症の青年期・成人期向けの検査です。

検査から本人の認知段階等に応じて使用できる支援ツール等の選択ができます。

中学部段階の社会性の学習の課題設定

インフォーマルな検査

- 生徒の日頃の生活の調査
学校生活の調査 家庭生活の調査 職業体験の時の調査
 - ★ 日常生活で社会性の障害のための困っていることは？
 - ★ 生徒が使っている手掛かり（ヘルプカード）
 - ★ 生徒が持っていないとできない手掛かり（コミュニケーションカード）
 - ★ 社会性の障害のために周りが困っていることは？
 - ★ できている援助・不足している援助
- 生徒の将来の生活の予測
 - ★ 将来の生活で、困ると考えることは？

フォーマル検査

- 標準化された検査の実施
 - ・田中ビネー式知能検査 ・WISC Ⅲ
 - ・新版S-M社会生活能力検査 等
- 自閉症の障害特性に応じた検査の実施
 - ・太田ステージ ・自閉症教育の7つのキーポイント
 - ・PEP Ⅲ ・TTAP 等

課題の設定

目標の整理

★どんなことを身に付けさせるか？

目標達成のための課題設定

★大まかな指導目標

(2) 指導目標の設定と社会性の障害の課題

実態の把握に基づき課題の設定を行った後、一人一人に対するより詳細な指導目標の設定を行います。今回の研究・開発で実践された具体的な指導目標設定のための整理の仕方について紹介します。

① 状況や行動の文脈に応じた分析

中学部の社会性の学習の指導では、例えば、状況に応じた適切な挨拶を行うなど、状況や行動の文脈（前後関係や背景・状況などを含む一連の流れ）に応じた学習を行うことが重要であり、状況に応じた行動を指導するためには、一連の流れの中で、どのような困難があり、どのような手掛かりや手だてを講じたらよいかを明確にすることが大切です。そのためには、次のような表を使って整理することも一つの方法です。

| 状況 | 困難（予想される行動） | 状況に応じた行動のための手掛かりや手だて |
|-----------------------------|---|---|
| 4 人程度の小集団で、カードゲームの7並べを行うとき、 | <ul style="list-style-type: none"> ○自分の番になっても行動できない。 ○自分の番まで待てないで、カードを並べてしまう。 | <ul style="list-style-type: none"> ○順番カードを使用する。 ○順番カードを前に友達からもらったら（手掛かりに注目させる）自分のカードを並べる。 ○自分の番が終わったら、次の友達に順番カードを渡す。 |

② 課題分析を用いた分析

買い物のように、複数の行動がつながっていく流れのある活動の場合は、次の表のように時間の流れにそって、細かい行動に分析していく方法があります。この分析は、課題分析と呼ばれています。

| 学校の近くのコンビニエンスストアで、メモに従って買い物をする。 | | | | |
|---------------------------------|------------------------|---|------------------|---|
| | 行動 | 生徒 A の評価と社会性の障害に起因する困難 | 生徒 A の個別目標 | |
| | | | 買い物スキル | 社会性 |
| 1 | ストアに入る。 | | | |
| 2 | かごを取る。 | ○駆け足で、店の奥まで入ってしまう。 | | ○入り口でかごとり、ゆっくり歩く。 |
| 3 | メモを見る。 | ○買う物が分からない。 | メモを見て、買うものを確認する。 | |
| 4 | 品物を探して、かごに入れる。 | ○色々な商品にさわってしまう。 | | 買う物以外にさわらない。 |
| 5 | レジに向かう。 | | | |
| 6 | レジに並んで、自分の番を待つ。 | <ul style="list-style-type: none"> ○レジのどの列に並べばいいか分からない。 ○レジの列に並んでいられない。 | | <ul style="list-style-type: none"> ○一番端のレジに並ぶ。 ○列を離れない。 |
| 7 | 支払いをする。（財布からお金を出して払う。） | <ul style="list-style-type: none"> ○レジの人の対応に合わせて、お金を出せない。 ○支払いの時間がかかる。 | ○メモを見て、お金を出す。 | ○レジの人の言葉に応じて、支払いをする。 |
| 8 | お釣りがあれば、もらう。 | ○お釣りやレシートを受け取らないで、その場を離れてしまう。 | | ○レジの人の対応に応じてお釣りやレシートを受け取る。 |
| 9 | お釣りを財布に入れる。 | | | |
| 10 | 買った品物をもらう。 | ○店員の「手伝いましょうか」に対し、無反応又は無視する。 | | ○「ありがとうございます」と応える。 |
| 11 | ストアから出る。 | | | |

(3) 指導の手だて

① 指導目標の達成のための活動の中で「望ましい行動」の理解を図る。

社会の中で機能する知識や技術を学ぶためには、自分が置かれている状態や周りの人の行動などその場の状況ごとにどのような行動をするべきかを学習する

必要があります。そのためには、教師側が指導計画や指導方法を立案する段階で、授業の活動に先立って、課題に応じて、「望ましい行動」を選択できるように判断する学習の時間を設け、「望ましい行動」を学習することも一つの方法です。

例としては、ルールを守ることと守らないことの違い、マナーを守ることと守らないこと、役割分担を果たすことと果たさないこと、人からの期待に応えることと応えないことなどです。授業の導入で学習し、実際の活動で確かめていくことが必要です。判断の教材としては、絵、写真、ビデオ等を使って、望ましい行動と望ましくない行動を比較して、選べるようにしていくことが考えられます。

② 指導目標の達成のための活動に必要な支援ツール等の援助方法を決める。

自閉症を併せ有する生徒の場合、知的障害のみある生徒とは異なり、生活経験の繰り返しの学習や模擬場面を繰り返す学習で、ソーシャルスキルが獲得できない場合があります。具体的な場面ごとにモデルの行動と同じ行動を学習することや支援ツールを学習していくことで実際の行動に移せるようにしていく学習を積んでいくことです。

③ 意図的な状況設定

また、授業の中で設定した生徒の目標によっては、生徒が自ら状況を判断することを学習することもあります。その場合は、判断する状況を意図的に設定することも必要です。例えば、何かゲームを行う中で、やり方が分からないとき、また、順番が分からないとき、意図的に助けを求める練習をするといったことです。指導方法として、「教えてください」「だれの番ですか」などの決った言葉の使い方を指導することも一つの方法です。生徒は、自ら判断をし、その判断に基づきどのような行動をするかを学習していきます。また、物を運ぶとき、軽いものなら一人で運び、重い物なら周りの友達に助けを求める練習をする際、指導方法として、意図的に、重いものと軽いものを運ぶ場面を導入することも一つの方法です。生徒は、重くて一人で運べないか、軽くて一人で運べるものかを自ら判断をし、その判断に基づきどのような行動をするかを学習していきます。

支援ツール等を使用することも、意図的な状況設定があることで、援助する人がいない場合でも、自分で判断して使用できるようにしていく工夫が必要です。

④ 適切な行動に導くヒント

指導場面で、生徒に学習して欲しいその場に応じた行動を導き出すための手だてを計画していくことが重要です。適切な行動を導き出すための手だてとしては、例えば、生徒が正しい行動に気付くために、モデルを示すこと、指差しをすること、言葉で指示する、あるいは、行動を示す絵カードのような視覚的な手掛かりなどがあります。

⑤ 中学生段階の評価—生活年齢相応の評価

学習を進めるためには、適切な学習の評価（強化）が重要です。その場合、生

活年齢に応じた評価（強化）をすることが大切です。

課題を達成し、できなかったことができたことは、本人にとって、大きな喜びとなり、また、学習に取り組もうという動機付けにもなります。しかしながら、このような自己評価だけでは、全ての学習が進むとは限りません。指導する教員や保護者からの賞賛や励ましが必要になります。この賞賛や励ましについても、中学部段階の生活年齢に応じたものであることが重要です。

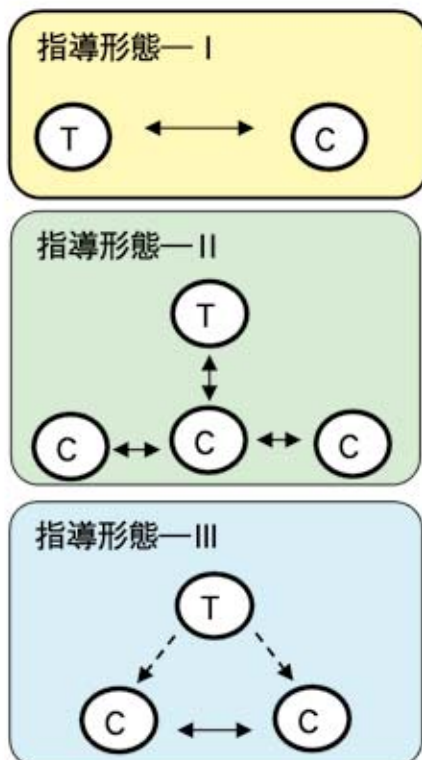
また、中学部段階では、星取表を活用し、適切な学習ができたならシール等を貯め、ある基準までシール等がたまったら、好きなゲームやお金と交換できる対価システム（トークンエコノミー）など、将来の生活にも活用できる評価システムの使用が大切です。

⑥ 視覚支援等の適切な使用

学習を進めるに当たり、必要な構造化や視覚支援を用いることが大切です。しかしながら、構造化や視覚刺激の使用は、生徒にとって必要な支援を提供するという視点が大切です。また、これは学習の段階によっても変わってきます。学習を始めたときは、全体的な構造化や絵カードやスケジュールを必要としても、学習が進むうちに、必要な支援は部分的になるということもあります。

⑦ 中学部段階の指導形態

小学部の社会性の指導書では次のような指導形態が提案されました。



指導形態一Ⅰは、教師と児童・生徒が対面で向き合う個別学習です。これは、教師と具体的なやり取りを通して、児童・生徒が他の人との関係をしっかりと形作ることを期待する指導形態です。

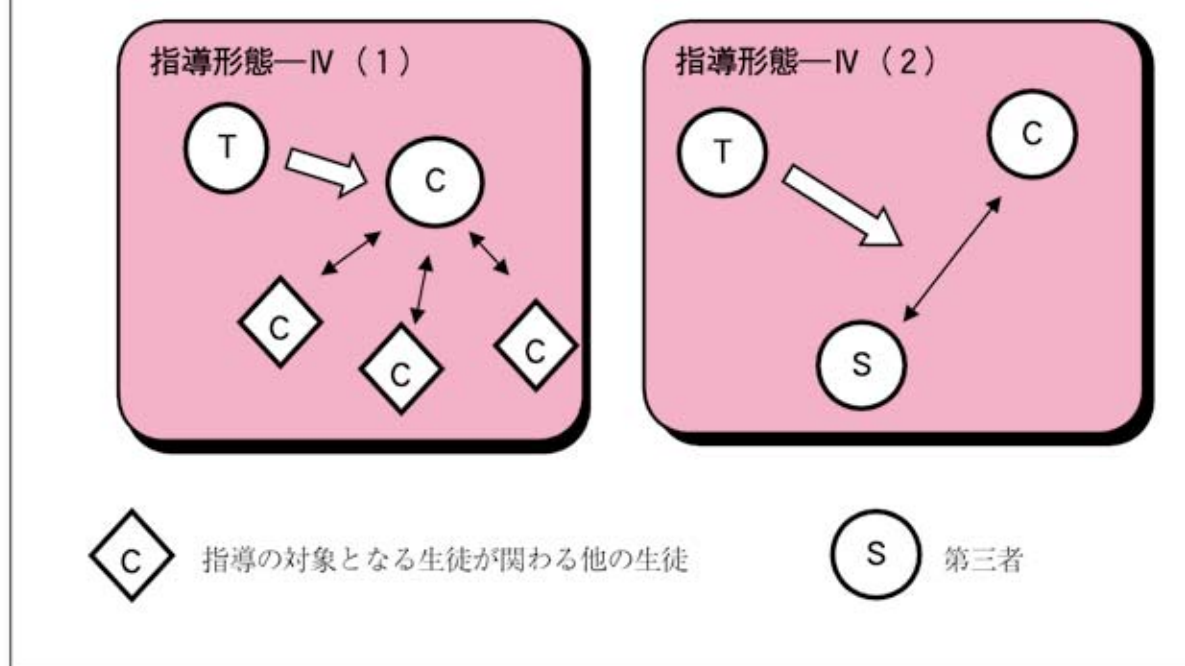
指導形態一Ⅱは、教師と二人から三人の児童・生徒による小集団の指導です。課題におけるやり取りは、教師と児童で行います。

指導形態一Ⅲは、教師と二人から三人の児童・生徒による小集団の指導ですが、課題におけるやり取りは、児童・生徒同士で行います。

小学部の社会の学習の実践の中では、指導形態一Ⅲの次に続く形態は、他の授業か活動で行うこととしていました。しかしながら、中学部での研究授業をすすめる内に、教師の働きかけによって、指導対象の生徒ごとの実態に応じて、特定のペアではなく、その状況で相手が変わる組み合わせやコンビニエンスストアでの買い物のように、教師や生徒だけの関係ではなく、

店員さんのような第三者が学習に参加する指導形態がありました。このような指導形態を**指導形態一Ⅳ**とします。

指導形態—Ⅳ



(4) 配慮点

① 学習したことが生活の中で生かされること

社会性の学習で学ぶことは、社会に出たときの学習上、生活上の困難の軽減を図ることの助けになる知識や技能、態度、行動です。このため、学んだことが生活の中で実際に使われていくことが重要な視点になります。ルールやマナーを守れることは、人からの期待に応えること、仲間からの期待に応えること、学校や地域からの期待に応えることにつながります。学んだことを実際の生活の中で使い続けていくことによって、本人の学校生活や社会生活がより円滑になっていくこと、豊かになっていくことが大切です。

② 実際の場面で学習することが難しい課題の指導

社会性の学習の課題の中には、実際の場面を活用して指導することが難しい場合や実際の場面での多くの指導回数に取りにくい課題もあります。このような課題の場合は、模擬場面を設定した指導や絵や写真やビデオを活用し、状況を想定して、どのような行動をするかを考えることによって、状況に応じた行動等を学習する方法も考えられます。また、略図を使って、実際にその場にいかなくてもその場の状況を模擬的に学習することや、状況や因果関係を図にして学習することも考えられます。このような模擬場面を設定した学習等は、実際の場面の指導をより効果的にすすめるための方法として考えることができます。

③ 社会性で学習したことを他の授業で生かす

社会性の学習で学ぶことは、自閉症の社会性の障害に起因する現在や将来の生活上、学習上の困難の軽減ですから、学習を進めるに当たり、社会性の学習の授業以外の日常生活の指導や生活単元学習、作業学習等の他の授業で、社会性の学習で学習したことを実際に活用していくという視点も重要です。

ア 日常生活の指導において

日常生活の指導の掃除の場面において、自分に与えられた役割に応じて、役割を果たすことの大切さを知り、友達と共同して活動することの大切さを知ることなどが考えられます。例えば、役割を担当することが望ましいことを理解し、友達と一緒に大きな机等を運ぶこと、周りの動作に合わせて雑巾がけを行うことなどが考えられます。また、役割カードに応じて学級係活動を行うこと、プリント等を友達に配ることなども、社会性の学習で、カードの使用や友達とのやり取りを学び、実際の場面で、生かしていくこととなります。

イ 生活単元学習において

地域生活に関する学習が多い生活単元学習では、店舗や交通機関等でのルールやマナーを学習することが多くなります。社会性の学習で学習した支援ツール等を使用していく実際の場面です。また、学級集団や学年集団等の集団で活動するような単元においても、集団活動で直面する困難を社会性の学習で軽減することで、より円滑に集団活動の参加することが期待できます。順番のあるゲームや集団活動への参加については、順番カードの使用について社会性の学習で学び、その手掛かりをもって、ゲーム等に参加することなどが考えられます。

ウ 作業学習において

作業に必要な知識や技能等は、作業学習の目標となりますが、作業を進める上での対人関係やルールの理解等は、社会性の学習で学習したことを発揮することができます。例えば、作業手順に迷ったときに、ヘルプカードを使用する方法や作った製品の取り扱い方、周りの友達にぶつからないように作業室内を移動すること、時には、友達との共同作業や道具の貸し借り等、社会性の学習で学習した技能や手掛かり等を活用して、その場に応じた行動が取れることが期待されます。

エ 高等部に進学したときの職業教育において

中学部から高等部に進学すると作業学習の授業設定もより実際の職場環境に近くなり、職場実習もあります。高等部段階では、社会で働くためのビジネスマナーの学習も求められてきます。例えば、職場に行ったときの挨拶の仕方、仕事の報告、手助けなどの人への頼み方等、これらのことは社会性の学習の指導内容につながるものであると言えます。